OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高齢者のポジティヴ優位性に関する認知機序の解明 : 若年者との比較による実験心理学的研究
Author(s)	上野, 大介
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51863
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式3

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕高齢者におけるポジティヴ優位性に関する認知機序の解明
――若年者との比較による実験心理学的研究――

学位申請者　　上野　大介　　印

高齢期は，配偶者や友人との死別や病気の罹患といった多くのストレスイベントを経験する時期であるにもかかわらず，多くの高齢者は，このようなストレスイベントにうまく対処し，適応的な生活を送っている。このような現象は認知処理にもみられ，高齢者は若年者に比べてネガティヴな内容よりもポジティヴな内容に注意を向け，ポジティヴな内容を多く想起するポジティヴィティ効果が報告されている。その基盤となるポジティヴ優位性を説明する理論として，近年注目されている社会情動的選択性理論が挙げられる。社会情動的選択性理論（Socio-emotional Selectivity Theory）とは，スタンフォード大学のLaura L. Carstensenが1992年に『Psychology and Aging』で提唱した理論であり，将来に残された時間や能力の知覚が社会的な情動の選択性に関する動機づけに影響を及ぼすといった理論である。しかしながら，ポジティヴ優位性がみられない研究もあり研究間の不一致は，実験項目や実験デザインなどが挙げられ，第１章では，社会情動的選択性理論ならびにポジティヴ優位性の認知機序を解明する余地があることを示した。本学位論文の目的は，ポジティヴ優位性に関する以下の五つの研究を実施し，高齢者におけるポジティヴ優位性の認知機序を実験心理学的な手法を用いて明らかにすることである。

研究1　単語の情動評価における年齢差に関する研究（第2章）

本邦において高齢者と若年者を対象に多くの単語に対する情動価に関するデータは公刊されているものの，情動の強さである覚醒度については検討されていない。情動価だけなく，覚醒度も情報処理に影響を及ぼすため情動価と覚醒度の関連性を検討する必要がある。そのため，高齢者と若年者を対象に単語の情動価と覚醒度に関する記述データを纏めることを第一の目的とした。また，情動価と覚醒度において年齢差がみられるのかどうかを詳細に検討し，単語の情動評価におけるポジティヴ優位性について明らかにすることを第二の目的とした。研究1では，110語の名詞に対する情動評価の年齢差を検討し，若年者群と高齢者群が評価した情動価と覚醒度に関する単語セットを作成した。32名の高齢者群と26名の若年者群を対象に，単語に対する情動価の評価点ごとの単語数と覚醒度に年齢差がみられるのかどうかを検討した。その結果，ニュートラル単語の単語数に年齢差はみられなかったが，高齢者群は若年者群に比べてポジティヴ単語の単語数が少なく，ネガティヴ単語の単語数が多かった。覚醒度では，年齢差はみられず両群ともにネガティヴ単語の覚醒度を高く評価し，ポジティヴ単語の覚醒度を低く評価していた。これらの結果から，情動価におけるポジティヴ優位性がみられなかったのは，ポジティヴ単語の覚醒度を低く評価していたためだと考えられる。

研究2　写真の情動評価における年齢差に関する研究（第3章）

本邦において若年者を対象にIAPS（International Affective Picture System）の情動評価は検討されているものの，高齢者と若年者とでは情動調整機能の違いにより情動評価が異なると考えられる。そのため，高齢者群と若年者群を対象にIAPSの情動価と覚醒度に関する記述データをまとめることを第一の目的とした。また，情動価と覚醒度において年齢差がみられるのかどうかを詳細に検討し，画像の情動評価におけるポジティヴ優位性について明らかにすることを第二の目的とした。研究2では，120枚のIAPSに対する情動評価の年齢差を検討し，若年者群と高齢者群が評価した情動価と覚醒度に関する画像セットを作成した。31名の高齢者群と31名の若年者群を対象にIAPSから選んだ120枚の画像に対する情動価の評価点ごとの画像数と覚醒度に年齢差がみられるのかどうかを検討した。その結果，ポジティヴ画像，ネガティヴ画像，ニュートラル画像ごとの画像数では年齢差がみられなかった。覚醒度でも年齢差はみられず，両群ともにネガティヴ画像の覚醒度を高く評価し，ポジティヴ画像の覚醒度を低く評価していた。これらの結果から，高齢者は若年者に比べて情動調整が高いため，ネガティヴ画像に対する覚醒度に敏感であった可能性がある。また，研究1と同様に情動価においてポジティヴ優位性がみられなかったのは，ポジティヴ画像の覚醒度を低く評価していたためだと考えられる。

研究3　顕在記憶指標におけるポジティヴ優位性に関する研究（第4章）

ポジティヴ優位性に関するこれまでの研究では，意図された検索を測定する顕在記憶指標を多く扱ってきた。記憶におけるポジティヴ優位性を検討した研究では，情動を伴った記銘項目を用いていたため，ポジティヴ優位性が記銘項目に対する注意によって生起しているのか，検索によって生起しているのか不明である。また，高齢期では意図されない自動的処理や潜在記憶は低下しないことが報告されている。したがって，ポジティヴ優位性が意図されない検索を測定する潜在記憶においてもみられる可能性がある。そこで，研究3ではニュートラルな記銘項目の直後に情動を喚起する画像を呈示して，情動価を間接的に付加した記銘項目を用いて，ポジティヴ優位性が注意によって生起しているのか，検索によって生起しているのかを明らかにする。研究3では顕在記憶指標を用いて，ポジティヴ優位性がみられるかどうかを検討した。48名の高齢者群と48名の若年者群がポジティヴ，ネガティヴ，ニュートラルの写真をニュートラル単語の直前に呈示することによって情動価を付加した単語を記銘し，その後，自由再生課題と再認課題を受けた。その結果，顕在記憶では若年者群のネガティヴ条件の成績が高く，高齢者群にネガティヴ優位性の減少といった広義のポジティヴィティ効果が確認され，社会情動的選択性理論が支持された。再認成績では，ポジティヴ優位性がみられず，検索の処理レベルが深い再生でポジティヴィティ効果がみられることを示した。

研究4　潜在記憶指標におけるポジティヴ優位性に関する研究（第5章）

ポジティヴ優位性が意図された検索によって生起しているのか，意図されない検索によって生起しているのかを明らかにするため，研究4では潜在記憶指標を用いてポジティヴ優位性がみられるかどうかを検討した。30名の高齢者群と27名の若年者群が研究3と同様にポジティヴ，ネガティヴ，ニュートラルの写真をニュートラル単語の直前に呈示することによって情動価を付加した単語を記銘し，その後，語幹完成課題と自由再生課題を受けた。その結果，両年齢群ともポジティヴ条件とネガティヴ条件の成績がニュートラル条件の成績よりも高く，ポジティヴィティ効果は確認されなかった。また，再生成績では若年者群では情動価の影響がみられず，高齢者群ではポジティヴ条件の成績とネガティヴ条件の成績がニュートラル条件の成績より高くポジティヴ優位性がみられなかった。潜在記憶では高齢者群も若年者群も情動の選択性がみられなかったことから，SSTに基づく動機づけによる情動の選択性は潜在記憶ではみられないことを示した。

研究5　高齢者の情動記憶検索に保持期間が及ぼす影響に関する研究（第6章）

保持期間によって情動価が記憶に及ぼす影響は変化することが報告されており，保持期間がポジティヴ優位性に影響するのかどうか検討するため，顕在記憶指標と潜在記憶指標を用いて，15分後と5ヵ月後の想起にポジティヴ優位性がみられるかどうかを検討した。49名の高齢者群が研究4と同様の記銘課題後，15分後と5ヵ月後に自由再生課題と語幹完成課題を受けた。顕在記憶では，両測定時期において情動を喚起する項目の再生成績はニュートラル条件の成績より高かったが，ポジティヴ優位性はみられなかった。潜在記憶では，情動を喚起する項目の再生成績とニュートラル条件の成績とに差がみられなかった。これらの結果は，保持期間は顕在記憶指標と潜在記憶指標との情動検索に影響を及ぼさず，覚醒度によって記憶が想起されやすいことが示された。

第7章では，本論文で実施した五つの研究について考察を行った。研究1と研究2では単語と画像について9件法によって情動評価を行い，それらの尺度の信頼性と妥当性が確認された。また，研究1では高齢者群のポジティヴ単語の覚醒度が若年者群のポジティヴ単語の覚醒度に比べて低く，高齢者群のネガティヴ単語の覚醒度が若年者群のネガティヴ単語の覚醒度に比べて高かったのに対して，研究2では情動価ごとの画像数と覚醒度に年齢差がみられなかった。画像と単語で情動評価の年齢差に違いがみられたのは，単語の情動評価を行う場合，単語の意味処理に依存し概念駆動型の処理が優先されたため年齢差がみられ，対照的に画像の情動評価を行う場合，画像の視覚処理に依存しデータ駆動型の処理が優先されたため年齢差がみられなかったと考えられる。研究3と研究4は，ポジティヴ優位性が意図された検索処理によって生起していること，および概念駆動型の処理で生起していることを明らかにし，社会情動的選択性理論を支持するものであった。研究5では，潜在記憶において情動が検索に及ぼす効果がみられなかったものの，保持期間によって情動が検索に及ぼす影響はみられなかった。本研究では，保持期間によって記憶成績は低下するが，情動が記憶に及ぼす影響は変化しないことが示された。本論文では，五つの実証的研究によって，ポジティヴ優位性が概念駆動型処理を促進する状況下で生じることを示し，情動を調整したいという動機づけが認知処理に影響を及ぼすというSSTを支持する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名（　上野大介　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主査　教授	佐藤眞一
	副査　教授	苧阪満里子
	副査　准教授	権藤恭之

論文審査の結果の要旨

Laura L. Carstensenが1992年に提唱した社会情動的選択性理論（Socio-emotional Selectivity Theory）は，未来展望の観点から世代による情報選択の動機づけが異なることを示し，実生活を反映する社会心理学的研究から実験室におけるより詳細な要因の効果分析まで，広範に研究が展開されてきている。なかでも記憶機能に関しては，社会的記憶の研究が先行し，実験室における統制実験による詳細な研究では未だ残された研究課題も多い。

そのような研究状況のなか，本研究では高齢者は若年者に比べてネガティヴな内容よりもポジティヴな内容に注意を向け，ポジティヴな内容を多く想起するポジティヴィティ効果の基礎となるポジティヴ優位性に着目し，5つの実験を系統的に実施し，社会情動的選択性理論の示す高齢者におけるポジティヴ優位性の認知機序を詳細に検討した。

研究1（第2章）では，一連の実験の前提となる単語の情動価および覚醒度に関するデータ収集とその年齢差を明らかにすることを目的に，32名の高齢者群と26名の若年者群を対象に，110語の名詞単語に対する情動価の評価点ごとの単語数と覚醒度に年齢差がみられるかを検討した。その結果，高齢者群は若年者群に比べてポジティヴ単語の単語数が少なく，ネガティヴ単語の単語数が多かった。覚醒度では，年齢差はみられず両群ともにネガティヴ単語の覚醒度を高く評価し，ポジティヴ単語の覚醒度を低く評価していた。これらの結果から，情動価におけるポジティヴ優位性がみられなかったのは，ポジティヴ単語の覚醒度を低く評価していたためと考えられた。

研究2（第3章）は，画像に対する情動価と覚醒度のデータ収集と年齢差を明らかにする目的で実施された。International Affective Picture Systemから選んだ120枚の画像について，31名の高齢者群と31名の若年者群を対象に，120枚の画像に対する情動価の評価点ごとの画像数と覚醒度に年齢差がみられるかを検討した。その結果，年齢差はみられず，ネガティヴ画像の覚醒度を高く評価し，ポジティヴ画像の覚醒度を低く評価していた。研究1と同様に情動価におけるポジティヴ優位性がみられなかった理由として，ポジティヴ画像の覚醒度を低く評価していた可能性が示唆された。

ポジティヴ優位性が意図された検索によって生起しているのか，意図されない検索によって生起しているのかを明らかにするため，研究3（第4章）では顕在記憶指標を用いて，研究4（第5章）では潜在記憶指標を用いてポジティヴ優位性がみられるかが検討された。研究3では，48名の若年者群と48名の高齢者群が，ポジティヴ，ネガティヴ，ニュートラルの写真をニュートラル単語の直前に呈示されることによって情動価を付加した単語を記銘し，その後，自由再生課題を行った。その結果，顕在記憶では若年者群のネガティヴ条件の成績が高く，高齢者群にポジティヴ優位性が確認され，社会情動的選択性理論が支持された。研究4では，27名の若年者群と30名の高齢者群が研究3と同様の記銘課題後，語幹完成課題を行った。その結果，両年齢群ともポジティヴ条件とネガティヴ条件の成績がニュートラル条件の成績よりも高く，ポジティヴ優位性は確認されなかった。

研究5（第6章）では，保持期間がポジティヴ優位性に影響するかを検討するため，顕在記憶指標と潜在記憶指標を用いて，15分後と5ヵ月後の記憶成績にポジティヴ優位性がみられるかどうかを検討した。49名の高齢者群が15分後と5ヵ月後に自由再生課題と語幹完成課題を行った。その結果，保持期間は顕在記憶指標と潜在記憶指標との情動検索に影響を及ぼさず，覚醒度によって記憶が想起されやすいことが示された。

第7章の総合論議では，以上の実験からポジティヴ優位性は情動を調整したいという動機づけが影響を及ぼす概念駆動型処理を促す状況下で生じることを考察し，高齢期における加齢認知と動機づけに関する新たな知見が示された。

本研究は，今後大きな発展が期待される認知加齢研究に対して，上記のような実験に基づく理論的な貢献が認められる。このことより，本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。